

## 巻頭言

# 卒業生

藏 知 毅

3月も中旬を過ぎると春の陽ざしも麗らかに、気持ちのよい日が続くようになる。方々の学校では卒業式が始まり、私達の耳にも懐かしい「仰げば尊し我が師の恩……」の歌が聞えて来、ホテルの光りのメロディーに送られて校門を巣立って行く若い人々の張り切った姿が見られ、何んとなく祝福を贈りたい気持ちになる。

ところがラジオのとんち教室では第何回目かの落第式が青木先生の司会で、いとも楽しく行なわれているのである。

一方は楽しい希望に満ちた卒業式であり、一方は番組を続けるための落第式である。卒業式をやっしまえばそれで終いであるが、仕事を続けて行き、ますます内容を充実するためには落第式にしなければならぬのである。

今年になってから急に畜産の問題が喧ましくなってきた。農業構造の改善が叫ばれる折柄、畜産に対する評価は次第に高くなって来た。所謂上昇株と云うところかも知れない。そのためか新しく畜産に手を出す人が多い。畜産を取り入れなければ時代遅れの様思うのかどうか知らないが、とにかく養鶏だ、酪農だ、肥育だ、豚だと賑やかなことである。それだけになかなか熱心でよく勉強もし、研究もされて

いる様であるが、さて取組んでみると畜産経営と云うものは、考えていた程なまやさしいものではないので驚いている人が多い様である。畜産も企業的経営となるとそれほどむつかしいものなのである。

ところが反面畜産界にはなかなか大天狗、小天狗が揃っていて、畜産のことなら俺でなければと云う人が多いのである。畜産を始めた当時はよく勉強をして、経営の工夫もし、新しい知識も取り入れるが、2-3年もすると勉強の方は卒業して、小天狗に早変わりする人が多いので困ったことである。

私はかつてジャージー農家の飼養管理講習会の終了式に出て、一応講習は終わったが、本格的な仕事はこれからである。卒業しないで落第をして、講師と連りをもって、もっと勉強してほしいと話したことがある。

世の中は絶えず前進しているのである。卒業をした気持ちになって、同じ様な経営を繰り返しているとすれば、それはむしろ退歩になるかも知れない。新しい経営のために卒業生にならないでほしいものである。